

5-4

主題 暮らしのインセンティブ

介護観の変革

副題 イコールパートナーに向けての障害物競争

その方らしい生活の追求

研究期間 14ヶ月

事業所 指定介護老人福祉施設 こぐれの里

発表者：木村康治（きむらこうじ）

アドバイザー：

共同研究者：松本瑛乃、渡邊眞敏、石渡戸栄子

電話 03-3925-0477

メール kogurenosato@earth.ocn.ne.jp

FAX 03-3921-4373

URL <http://tokyoyushinkai.jp/kogurenosato/>今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

練馬区大泉学園駅より徒歩10分。閑静な住宅街にある。入所50床、短期6床、6つのユニットからなり完全個室。入所されている方の平均介護度は平成22年6月現在4.36、平均年齢約85.6歳

《研究前の状況と課題》

14か月前の状況だが、入所されている方々の生活を考えるとはいえ、失禁汚染多いからと紙おむつ、リハビリパンツを着用し、移乗が厳しいからとトイレに座らず、夜間帯手が回らないからと全利用者決まった時間の排泄交換を行い、皮膚が赤くなればすぐに軟膏塗布で解決する。また、入浴も職員が安楽だからと機械浴・特殊機会浴槽を使用。食事は車椅子上で摂取するのがスタンダード。外出は職員の余裕がないからという事で、ほとんど行かずに施設内の生活のみという状況。入所者が中心と口では言っているが、実際の所は職員が中心の介護になっていた。

入所されている方の可能性を広げるのではなく、障害があるからといろいろな障害を作っていたのは、まぎれもなく自分達介護職で、障害物になっていた。いかに障害物をなくし、その方が今まで当たり前で生活されていた環境を再び築いていっていただくかが介護職のプロ根性の見せ所。そこを重点課題として動き始めた。

《研究の目標と期待する成果》

『その人らしい生活を取り戻す』事を介護の目標として、排泄・食事・入浴・余暇活動・外出、そして相手をより良く知っていこうという取り組みを行っていった。

いかに障害物を各入所者から取り除けるか。その事によって、入所されている方々の生活の幅がより広がり、最後までその方らしい生活を追求できたら、その方の人生はより良いものではないのか…。障害があるからと諦めの人生を送って頂くのではなく、障害があろうが、今までの生活は変りなく送れるよう、職員各々が諦めない介護をして行こう。そんな気持ちを全職員強く持ち、知識・技術・気持ちを高めていった。

障害物をなくしていく事によって入所されている方々の様子がどう変化していくのか。また、ご家族や職員各々が入所者の表情等の変化を感じ、いかに変化していくのか。大きく変化がなくても感じ取れるようになっていけたらと期待した

《具体的な取り組みの内容》

①自然排泄：当初は64%の方が、昼夜いずれか紙おむつかりハパン着用。理由は失禁汚染する恐れのため。そこで、四名の職員中心、他の職員にも協力してもらい、実動一日で紙おむつ・リハビリパンツを綿パンツに変更し一週間の検証期間を設ける。夜間3～4回入り、時間は各々違う（随時確認）。綿パンツは家族依頼し事前に購入して頂く。それと並行し一人介助でトイレorPトイレへの残存機能を生かした移乗方法を覚える（指導等2～3か月）。その後水分量・運動量・食事検討を行い脱緩下剤を進めている。CM・相談員・介護・看護・栄養士等、全職種で連携し排泄カンファ4名ずつピックアップし実施。

②車椅子から椅子へ：以前は66%の方が、車椅子乗って食事。理由としては移乗技術、姿勢に対する知識等の欠如あり。姿勢と残存機能を生かした移乗技術を学び、椅子・テーブルも各々入所者にあった物へ（10か月かかる）。VE・VFも並行し導入。

③機械を使わず一般浴槽へ：特殊機械浴槽使用者12名、リフト浴21名使用。理由は、入れる技術がなかったのと機械で入れられるのは怖いという認識がなかった。他に職員の安楽。入浴移乗技術学び、現在も進行中。

④相手を知り、外出し、更に相手を知る：個人個人のプロフィールをプロフィールシートというのに書いていく。好き嫌い、生い立ちなどからご本人・ご家族と外出を計画し、実行する。

《取り組みの結果と評価》

①現在昼夜綿パンツ92%。ほぼ100%に今後なる。全入所者がトイレに座っている。トイレに何年ぶりに座っても出る物は出る。その時の感動と今までの罪悪感、両方感じ、当たり前で座る事がどれだけ大事か…改めて痛感。脱緩下剤に関しては、水分量UPや残存機能を生かした移乗機会増加による運動量UP、食事の検討を通し進めているが、結果の出る方、出ない方と別れている。

②現在90%の方が椅子での食事。椅子や机の検討。VE・VFを入れた姿勢の検討を継続。椅子に座って摂取する事によって、自力摂取の方が出たり、機械的でない空間になり雰囲気明らかに変わった。ご家族よりそういう意見あり。

③現在特殊機械浴槽0名、リフト浴5名（ご本人よりの意志）になっており、ほとんどの方が一般浴槽に入れる。特殊機械浴槽使用していたある入所者で、大声と奇声を張り上げていた方が、一般浴では「ありがとう」と、とても静かに気持ちよさそうにお風呂に入るようになった。

④職員人数は以前と変化ないが、散歩は月で延べ70回近くは行く。外出は、毎月何名かが、おのおの行きたいところ（墓参りや実家、思い出の場所、東京ドーム、コンサート…等など）に行っている。入所者・ご家族の表情が全然違い、職員も業務に対する楽しみ方や関わり方が全然違う。

《まとめ》いかに普通の生活に戻していけるかが、介護の専門性で、求められている所と再認識させられている。

《提案と発信》

『入所者』の『入所者』の為の環境を更に築いていくには、『職員』の壁を壊していく必要があると思う。まだ介護保険制度が産声を上げて10歳、これから成人を目指し、一つの確立された大人になって行く為にも、『介護の場に携わる職員のプロ意識向上』は自ら図っていかなくてはいけないのと同時に、適切に育っていく国としての環境作りを期待したい。

【メモ欄】追加資料 有 無